

はじめに

遠か信濃の国より流れ来る大河は、たくさんの人と土地と作物を潤す長い旅を続けて、たくさんの生き物を潤す大海と出会い、我々に大きな恵みを与えています。この町の人々の営みは、それら大自然からの恵みを元手にした商いで成り立っており、嘗ては町中を駆け巡っていた堀割の存在が、生活の豊かさに大きく寄与していました。

その姿にいがたの繁栄に、必要不可欠だった堀割が消えて四十年が経ちました。人と物の流通を果たしていた堀と舟は、道と車に役割を譲って長い使命を終えたのです。


しかし今、清潔で安全で便利なこの現代都市に住む我々は、何か物足りなさを感じています。この乾いた町の中で、心の拠り所を求めて彷徨っているような気がします。その心の飢えを満たすべく、堀割プロジェクトは始まりました。堀跡を尋ねて堀の話を掘り起こし、堀を支え堀に支えられていた人々の暮らしを探ってきました。

先人達の汗と知恵と勇氣に学び、堀をキーワードにした新たなまちづくりに向けて、歴史を築いていく市民の皆様へ、この堀割絵図を送ります。

◎本の紹介

このマップを見て、堀についてもっと詳しく知りたい、昔の新潟の様子をもっと知りたい、という方はこちらの4冊を推薦します。実際に入手するのは難しいので、県立図書館や市立図書館で借りて読んでみてください。

※市立図書館は各図書館により置いていない本もあります。



**三芳梯吉の「砂丘物語」**  
～そして～ 大正初期の新潟と堀

このマップの表紙に掲載している墨絵は三芳梯吉作「砂丘物語」からの転載だ。三芳梯吉が存在せず、この「砂丘物語」が著されていないからこのマップづくりは難航していたに違いない。

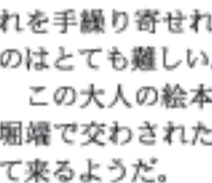
堀をイメージする時に、記憶のある者はそれを手繰り寄せれば良いが、見たこともない者にこれを要求するのはとても難しい。

この大人の絵本はそれをいとも容易にさせてくれ、まるで当時堀端で交わされた会話が開く、夕餉の炊(かし)ぎの匂いが漂って来るようだ。

三芳梯吉の幼少時代の原風景に代表される大正時代の堀をとりまく風景と風土が取り戻せるのなら、どれだけ代償を払っても良いのではないかとまで思わせてしまう新潟人必読の書である。

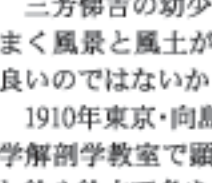
1910年東京・向島に生まれ、新潟で育った三芳梯吉は新潟医科大学解剖学教室で顕微鏡を覗くかたわらデッサンにはげみ、後に押し絵や絵本で名を成した。

いまやご本人も亡くならぬ、「砂丘物語」も絶版では新潟の心が遠のくばかりである。未完の次作も存在し、この会としてもそれを公開出版したいと願っている。同時に既刊分の再版も可能かもしれない。堀の復活とこちらのスピードとどちらが先になるのだろうか？



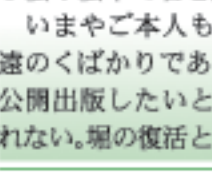
**新潟歴史双書5 新潟の堀と橋**

新潟に存在した堀と橋の、時代による移り変わりを中心とまとめた1冊です。堀が埋められた経緯などを知ることができる。この本だけでも、堀や橋について十分知ることができる。



**新潟わが街 柳と堀** 著者 徳川勇吉

新潟の地を愛する人の代表者である故・徳川勇吉氏の著したこの本は現在、大変残念なことに入手できない。街をみずみずしく表現した内容は、「堀の街・新潟」を号解とさせる。「交通渋滞解決のため安易に埋めた堀に未練はなかったか、他に方法はなかったか……」徳川氏は私たちに今でも問題提起を投げかけている。



**にいがたふる里さんぽ話** 著者 蒲原 宏

著者がふる里を、実際に「さんぽ」したメモを取りまとめた本である。おもに新潟のお墓や、社寺の話になっている。新潟に住んでいるのなら、一度は読んでもらいたい本である。

◎堀の存在時期をとりまとめた年表

堀の名前	別の呼び名	江戸時代		明治		大正		昭和		堀の名前	別の呼び名						
		1700	1800	1900													
堀に關係する主な出来事		新堀開削	開削	新潟大火(1880)	新潟大火(1908)	1910(明治43)年上水渠完成	1917(明治44)年原にガス灯がともる	自動車の登場	都市計画の進捗	1927年 新潟市都市計画 建設費削減	1952(昭和27)年 下水道事業開始	新潟大火(1953)	地震対策が実施される	ポンプ埋設型 都市排水事業の開始	新潟国体 新潟電機	堀に關係する主な出来事	
新堀に關係する主な人物		〇藤 康孝(1619-1618)	CYR 豊範(1843-1852)	〇アーネスト・ワトソン(1887) イギリス公使パータースー一團に奉節	〇R. W. フォスター・ウィッチ(1901)					〇ブルーノ・ワウト(1934)						新堀に關係する主な人物	
①西堀	寺町堀	1655														1964	①西堀
②東堀	片原堀	1655														1960(埋め)～63(埋め)	②東堀
③寺裏堀				1872													③寺裏堀
④他門川(多門川)	伊他門川	≒1866															④他門川(多門川)
⑤蔵所堀					≒1880												⑤蔵所堀
⑥宮浦堀			1872(埋め)														⑥宮浦堀
⑦般若堀				1875	1883												⑦般若堀
⑧寺裏横堀			1872														⑧寺裏横堀
⑨中横堀			1872		≒1880												⑨中横堀
⑩南横堀			1872		≒1880												⑩南横堀
⑪南新堀				1873(埋め)	1886(埋め)												⑪南新堀
⑫白山堀	一帯堀、御町堀	1655															⑫白山堀
⑬新津屋小路堀	二帯堀	1655															⑬新津屋小路堀
⑭新巻・通心小路堀	三帯堀	1658															⑭新巻・通心小路堀
⑮広小路堀	四帯堀	1655															⑮広小路堀
⑯御祭(五菜)堀	五帯堀	1655															⑯御祭(五菜)堀
⑰北横堀 東大堀堀			1872			≒1911											⑰北横堀 東大堀堀
⑱南大堀堀	清水堀		1872														⑱南大堀堀
⑲北新堀			1873(埋め)		1886(埋め)												⑲北新堀
⑳内他門川	他門内川	≒1866															⑳内他門川
㉑(字)裏川	裏口堀				≒1875												㉑(字)裏川
㉒字野下川	野川	不明															㉒字野下川
㉓赤坂堀					≒1875	≒1880											㉓赤坂堀
㉔本堀堀				≒1873													㉔本堀堀
㉕早川堀				≒1873													㉕早川堀
㉖舟入堀				1874													㉖舟入堀
㉗万代橋	近代、2代目は現代橋							萬代橋架橋 1886(明治19)年11月4日		△二代目開通 1909(明治42)年12月22日							㉗万代橋

※旧年の年号は、古い文献がないため推定であり未確認です。【参考文献】新潟歴史双書が新潟の堀と橋、新潟歴史双書が白山公園あたり、新潟市史「新潟わが街 橋と堀」(徳川勇吉 著)

※堀の番号は裏面地図中の堀の番号と一致しています。

新潟の堀割の歴史 - 「新潟の堀と橋」から -

新潟は、江戸時代の初めに全国で再編成された典型的な狭町のひとつであった。堀を通る舟によって運ばれる物や人が、湊町と海・川を結び役割を果たした。堀が通っていたので、町のどこでも同じ条件で商売ができた。堀割は、湊町新潟の基礎であった。

17世紀半ば、新潟町の移転から数十年のうちに、主な堀と通りが設けられた。南北方向に通る古町通は寺町堀(西堀)と片原堀(東堀)に挟まれ、本町通は片原堀と信濃川に挟まれていた。これらの堀や川は、東西に掘られた白山堀・新津屋小路堀・広小路堀・御祭堀の4本の横堀で結ばれ、後に新堀が掘られ横堀は5本となった。さらに、通りと堀端・川岸を東西に結ぶ小路が加わって、町中の各所を縦横に連絡する交通網となっていた。

白山堀は一番広く、深かった。幅は14間もあり、深さは通常で3尺であった。白山神社の境内地と周辺には米を保管する蔵があった。米は新潟最大の取扱商品であり、米と湊が新潟町の繁栄を支えていた。春になると、蔵の米は、回船に積み込まれて大坂や江戸に運ばれた。

白山堀が米の堀ならば、新津屋小路堀は野菜の堀、御祭堀は魚と野菜の堀であった。新津屋小路堀を挟んで本町通では、毎日未明から辰の刻(午前8時ころ)まで朝市が立った。町へ入る物のほとんどが横堀を通った。

寺町堀(西堀)は屋敷地の西端にあつて、町と奉行所・寺を画する堀である。そのため片原堀と対照的に橋が少なかった。寺町堀東側の通り(現西堀前通)には江戸時代後期になって店が増えた。

片原堀(東堀)は古町通と本町通の裏を流れる堀である。江戸時代中期には片原堀西側の通(現東堀通)にも家が建つようになり、新潟町の町役人は初代奉行の川村修就がこの通りを「日雇い縁ぎの人や川舟乗り、あるいは大豆・小豆・麻苧・乾物などを小売する店も中にはある」と説明している。片原堀は町の中心である古町通と本町通の間を流れており、人の往来は活発で、小路ごとに多くの橋が必要だった。



板柱木の橋(昭和初期) 資料提供:新潟市歴史文化課

上島と従来の町や下島との境に残った水路は野下川と呼ばれた。野下川は御祭堀・広小路堀・新堀へ入る船の通路として重要な役割を果たした。

毘沙門島の上流、新堀口から広小路堀口の地先に厩島が付くと新堀から直接信濃川へ出ることはできなくなり、広小路を経て野下川へ抜ける水路ができた。この水路は後に内他門川と呼ばれた。

殊島・樺島と大川前通・厩島の間には広い水路が残り、大川前通が他門とも呼ばれたことにちなんで、他門川と呼ばれた。

1759(宝暦9)年に大川前通下一之町(現上大川前通三番町)から片原堀まで新しい堀が掘られ、新川と呼ばれた。

1878(明治11)年7月、「日本奥地紀行」を書いたイギリス人女性イザベラ・バードが新潟町を訪れた。「すべてが舟で運ばれている。…運河は新潟の非常に魅力のある特色となっている。」とバードは表現した。

1922(大正11)年7月大河津分水の通水による信濃川の水位の低下、天然ガス採取による地盤沈下などを要因に、堀の水がよどみ、「汚い、くさい、危ない」と市民から堀の存在は不要と、徐々に烙印を押されつつあった。

江戸時代から、その時代の経済活動や交通の変化によって、掘られ、埋め立てられてきた旧新潟町の堀は、1964(昭和39)年の新潟国体開催直前に、西堀を最後に、すべて埋め立てられた。高度成長を迎えた新潟には、もはや、堀を埋め立てることに異論を挟むものは少なかった。鉄道それに続く自動車交通の発達による道路づくりの必要性のため、約350年に及ぶ新潟の堀の歴史は埋められたといっている。国体直後、新潟地盤が町を襲った。復興に立ち上がる新潟には、苦勞して手に入れた道路が燦然と輝いていたのだ。

新潟町の堀に架かる橋について

明治初年に堀や橋が整備され、町の拡大に伴って、堀がさらに伸び橋の数も増えた。

橋も新しい堀に架かっただけでなく、それまで橋のなかった他門川にも、大きな橋が架けられたり、堀が交差する場所に4本の橋が架けられるようになったりした。

明治10年半ばには新潟島に133本の橋が架かっていた。

西堀には寺の門前に通じる、



四つ橋での会通り (明治中期頃)

21本の橋が架かっていた。大部分の橋は寺が架け、補修修繕を行っていた。

片原堀(東堀)では小路に橋が架かっていた。また、新津屋小路堀(二番堀)、新堀(三番堀)、広小路堀(四番堀)の交差する所には、四つ橋が架かっていた。新堀(三番堀)との四つ橋(東、西、南、北葉菜橋)の上では、下駄をふみならして盆踊りが行なわれた。

白山堀(一番堀)には白山神社の参道に通じる、白山橋があり太鼓橋の形をして、欄干は朱色であった。

新潟島の橋は木製のため、15年くらいで架け替えなくてはならなかった。



一番堀にかかる白山橋

にいがたを訪れた人と堀

暮末、新潟を訪れた吉田松陰が、本町通の医師であり學塾を開いていた中川立庵宅に逗留し、蝦夷へ向かう出立の日、小舟に乗り五葉橋で見送られたとある。(吉田松陰「東北遊日記」)新潟は、志士や文人墨客から慕われ、幾多の交流を生み育んだ町であった。新潟を訪れた歌人の多くは、堀と柳の情景を詠い残している。

柳あり 橋あり 杖のとめどころ 太田木甫

橋あまた柳のなかに隠されて水ある街の夕月夜かな 与謝野鉄幹

新潟や都の華修にこと変わる並木柳のたてよこの道 与謝野晶子

柳には赤き火かかり、わが手には君が肩あり、雪ふる、雪ふる。平出修

ふるさと の ふるえの やなぎ はぐくれ に ゆふべの 会津八一

ふねの もの かしく ころ



【堀と】

新潟歴史双書5 新潟の堀と橋

新潟に存在した堀と橋の、時代による移り変わりを中心とまとめた1冊です。堀が埋められた経緯などを知ることができる。この本だけでも、堀や橋について十分知ることができる。

新潟わが街 柳と堀

新潟の地を愛する人の代表者である故・徳川勇吉氏の著したこの本は現在、大変残念なことに入手できない。街をみずみずしく表現した内容は、「堀の街・新潟」を号解とさせる。「交通渋滞解決のため安易に埋めた堀に未練はなかったか、他に方法はなかったか……」徳川氏は私たちに今でも問題提起を投げかけている。

にいがたふる里さんぽ話

著者がふる里を、実際に「さんぽ」したメモを取りまとめた本である。おもに新潟のお墓や、社寺の話になっている。新潟に住んでいるのなら、一度は読んでもらいたい本である。